



俳諧

四

季

州

一



改正新稿

俳句四季草

江戸書林 茶屋書林

掌中芭蕉翁發句集

春之部

人を見ぬ春也かゝるは梅
蓬萊に雪もや 伴勢地和俊
うさかふな 潮もれも浦乃春
天津橋の雪は 何れも何俳
先日ハ直と一寐く 餅喰もぐぬ
二日あもぬらりとせし ちよ花の春

葺蕪 かりふを賣う川新菜水

猿別

梅りの菜まると夫結宿乃とろく汁
まもやくきり歳とろのふ月を毒
山里と菊菜返しむえ乃花
細代辰初の息よ何ふく
梅の本小ふ枝やせりきや梅の花
むめい香小ののせ目此世さし路水

わび古懐小抄ひら

めん小やくのけしきもさし梅の花
うらひきお笠落しとけ棧うな
雪や柳乃うし後敷のまき
うらひすや縁小糞もは振極の先
傘より押わけ見をほ柳うけ
これ物よけり於柳乃志をくけ
八九百をうくふふ於やふきう船

猫乃慈也む村園のおほ秋月
衆かきつりこんく為よ衆田乃奥
蛇喰ふと咬えおそろし維子乃考

高野へ流傳りて奥の院おの堂の
わらうとる歌よそ流小成と傳えんて

父母乃志きり小慈一維子乃考
或るうたう中流極子也維子の考
永交日と晴り多しぬひをうり飛

栖去新辨小文彦小あり

重葎よりらへ小やましく小侍うぬ
けろろ交小流ふ流しそむく燕

規子の贅

あゝ魚や心は目沢的流乃網
枯芝やまことり多流ふ乃一二寸

新大佛の記小文彦にあり
丈六の陽堂きりし流らえ

糸らんまや敏手合ま珠敷の毫
まゑや蜂の巣はくま根乃洩
菜畠小花見顔かゝるま
古池や蛙ひ込む音
蝙蝠も出まらま世乃屯ま音
花咲く七日露足敷ぬま音
まのり山ま日乃物乃ま
これれま清ま上野ま清ま

葛城山の禁とま

燈んま〜花小明〜 神乃顔
花の陰〜ま小似〜 旅ま
支考のめ御能首達とま
ひま務推まま老小又器一具
淋〜ままの〜の〜あ〜ぬ
あは〜まを乃〜ま月敷
四方より花吹入〜ま乃〜

古王君の庭ありし

庭に花ありいかに揺る那

春のやうさうさう小のそ仕立り

木乃れとて花もゆらゆら

山遠くして何やうゆらゆら

春柳乃れ流るるを流るる

まの庭を人小懐り

紫花もむねの世を離るる

山ふたやう流るるの白く時

は流るる山吹も流るる

大なり柳の時

夢即ち宿るはあつた

奥村のそと奥村のそと

り春のそと啼鳥の目と

記り幸の文鑑ふり

ゆくを流るるの流るる

夏之節

夏来ともきくおと川原の一葉は

旅人の吟

ひさし川流るるうら子負ぬ衣のえ

何と云はれり懐くふやあはの上

初とあすまのくは夏のむら尾忌

浪懐あり

何と記を大布系紙漉休月夜

時鳥たうや又尺牘何屋然も

以广乃漁人の矢出る啼也子親

形次歌あり

所を懐くも動れむけよわくまに

奈言あり

灌佛の目や生れ何ふ麻乃ふか

うの意やうす物あなむあし

鎌倉と生さく出きんま川 鑑

うゑもや市の子藪よ老狐啼

落柿金...

袖の... 小じり... 成るの料理の間

菫と... 青系... 茄子汁

片... 雲吹落せ 大井川

そり... ぬるのや 瀬田の橋

さみ... をあつめ... 上川

栗... 西の木と... 浄土

使... 春葉... 一生校也

桓... 木を... 也

世乃人... 付ぬ... 朝乃粟

障... 非抄... 日... 坐

法... 波... 辺... 系

世... 忘... 小田の... 局

白... の... 越...

風... り... や... の... 一... 唄

早苗や序のりやむしあのみ
 田一投うらまはれぬ新の如
 緩河もやもふも急も葉の白
 眉掃成面影みくもあのみな
 わらば心や敷をゆきの別産
 記り幸給文鑑ふあり
 うづかり角物とりけふ吹
 月とあてもそのあふはす戸の
 夏

的石秋泊

蜻蛉やうらまはれぬ月
 葉はるる銀あり
 夏草や花いそのともうゆ
 紅蓮屋の池橋を裏ふあり
 せんまのむねの本もとり
 佛頂禪師の庵を多うたて
 啄木も庵をうらまはれぬ
 夏草

おとふれおのせ失へ侍りしをいひて

夕陽を人なりをいへんふも交りて

夕顔や種をいろく乃ちくをい

名鶴啼き人乃ちくをい依を泊り

夕宵の紙續猿蓑ふあり

夏の萩や崩まきく時一初平一物

正成像

おとふれおのせ失へ侍りしをいひて

松の海をてやそかあき鶴舟火

蓮の香は目とかくらひや面乃鼻

蛙浮二句

きつらうや面平西籠り合歡花

夕晴やけくう平涼む波粒を夜

十八樓の記後日記よあり

ひつらう目ふえゆ歌子のを皆涼

初あやうとくえく涼瓜乃去

夕少と物もはづり瓜乃急
 瓜のほむりさきも後也蓮産時
 志のつはや岩よりさきと心蟬の聲
 中て死 幸しきとさくは蟬の聲
 雲の客いらり為ぬく月能山
 暑さへ日を海より入りしもの川
 六月也峯ふる雲墨阿~~~~山
 三月也網をぬれとも塩く~~~~ら

秋之部

その秋もききみあふ~~~~秋の秋意
 文月也六月也常乃秋雨も似は
 多た~~~~秋をゆく~~~~秋のきめ
 銀河の序風俗文選ふあり
 荒涼也依波小横~~~~阿多能川
 団冪の院日~~~~
 めさく和や蓋く~~~~院おら門乃垣

嵐雪の画小賛のそとせれを

初月を下多此半さくわらまあり
あゝあはれはさぬ萩のうねりか

旅籠の吟

初月何のし不抱女も寐さう萩と月
いと痛く中程素衣やせまか
硯を拾ふやくほ衣 不世の玉露
たの意はむらけとる小篋れり
びう〜笑撲足履さく角力せり
海人うぶを小唄ふま〜海いとさ
まはび〜のきんつし某よまはる
夏田の神社に宝物不実盛う甲あり
むしんやまかあとのり跡きり〜
いあつまや園のうらめ 又後の森
ま〜とまあ〜き〜ものぞらうり
葉の戸を知れや穂薺ふさ〜

桐の木よりうつら啼きたる塚乃内
誓の目もいふ中昔ぬきあき駒
丈の名乃ありともあきては千雀
昔極く叶はえ幸乃あはれんを
其を流せるはとそ

楳やいのら城か〜母々昔〜の〜
蕎麦をまき〜蕎麦〜もてるは正流
三日月や地とおるるる於蕎麦島
ありと何處多〜も似流三日月の存

兼得死に風俗又選ふる

舟を〜捐る高城もらあうら
柴の戸結舟やそを〜何〜の場
名月や門小流〜来る河か〜ら
名月や流せりらうそ教もす〜
雪折〜人せ休於月見うた
あ〜り〜あ〜りの夢や田乃〜り

名月結露りやとて後をうけ

月見紙和洋文探ふあり

采女侍友紙よみ乃月のお

三井寺の門出もつらやとよの月

名月やあつらひも瀬田乃橋

十六秋をりつるの月園のはり

のほのや二十七秋も三ヶ乃月

松茸やあつらひの魚をいふ

いひや啼る屍起つあゝ秋乃麻

あつらひと日をはきとちも秋の風

身中もさく大根のり秋の姿

人の寝せりありあつらひと流年かまれ

物心して唇はむしあゝのう勢

瘦あつらひわりちあつらひと

とやぐさあつらひもさく菊乃花

山中や菊をあつらひぬ湯の匂ひ

きくくの身やあふも古に佛とら
菊の花はくやる庭結ふ乃間
白或くや目ふまきくえ流藝と流

十三歌

檣柳結惹を月のなありう那
猿起る多猿の小神狐さぬさ
枯枝と鳥結と流りりり 秋のえ
は道やり人ちりり 秋乃書

松風の刺ぬめら川と秋書ぬ

小名木沢子と

秋と流れて川と生流と小松川
の秋やとと廣けと秋梨乃懸

瓢之流

山素堂

一瓢重黛山

自笑称箕山

莫慣首陽餓

這中飯顆山

秋公の垣棧小おへ流かさくゆもあさ

惠子ついで種ありも何して我ふ
 即ちのひひさこあり是れ多きみん
 つまらなくも入はく器よせむとすれそ
 大ふしそありふあはるはくえり
 俵うそとさきもむしむとすれおとち
 みるふれーあるひのいもくいま庵の
 いそー我程入し支もよのありとまそに
 よめさのこて海ある深縁やうてもちめて

限士素翁ふらふきこれと名を好しむ
 そのとををわふ志はす其のみれや戸せ
 ちとれくもくうふ山せうふ中れも
 飯顆山とち杜のすめる地ありと李白
 多と物色の向あり素翁李白
 うそりそ我貧をきふく甘む中す
 あつむれまといれ多ちり乃 密を
 たられはる時一壺も千金といふとく

黛山もろろしとむことあり

その野の瓢きうろ我ふの那

芭蕉捲青出

冬之部

初しとれ猿も小篋とほくあり

記行幸の文鑑よみ

旅人の中系名ふるまへんもの時多

宿りて名代あふまぬ時多

ホリしに句ひや付しもの多

こかしく小岩吹とうた移るうた

振舞の石ありれちう急いあ儀

海鳥のうた荒くおれ神の落葉か

病中此分

旅し病く憂愛枯燈どのけとれ

冬枯れ破よる物と家の中どのけ

星濟乃園と見えよや晴ちとり

誓ひと川見付くうきしりし侍

林あ月の末沼津の歌塚おとあふ令也

秋生多神も旅病の日数ら那

冬ころり又よりそむひはしりら

金屏紙塗内古片よ冬あもり

経法うぬ旅紙あふ旅や壺巨燧

風来ちふく

秋生とつり出さしりし旅病は

麦生とくふたかられ赤や 島村

鞠壺り小坊主あや大根引

葱ふく洗ひまきとふはむこふ

塩綱の歯く義もあやし魚の店

葛の糸ふの表んやりらふ物乃表

あ仙や白さ障子乃とらうつり

雪菊や粉糠のかほ白草端

いらりし喜や何れひはれま

まの 喜や 掛かゝる 於 檣の上
初由 羨や 亦 仙の 象の 多の 心 述
こも かくも なる ても や 雪乃 枯 尾 花
采 買 年 雪 結 袋 や あ け 路 巾
馬 と 人 跡 於 雪 結 河 多 家

熱田 迂 宮

磨 車 以 鏡 も 清 雪 乃 雪
日 波 之 上 雪 乃 け け 雪 乃 雪 乃 雪
い さ け け 雪 乃 け け 雪 乃 雪 乃 雪

箱 根 越 人 も 雪 乃 雪 乃 雪
生 々 々 々 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪
去 嘯 孤 塚 も 免 々 雪 乃 雪 乃 雪
人 々 家 々 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪
煤 掃 の 税 小 文 庫 以 有

雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪
雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪
雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪
雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪 乃 雪

何れは師走乃市より鳥
燦掃を己の柳津に大工の形
盗人小多ふと秋もりの年の昔
負多しを後を知らぬ年忘るを
旅とくくんくくき世の燦拂ひ
分別の庭をく記りきくの暮

掌中其角叢句集

春之部

日の暮れさきうな勢乃何由とて

題黄金

目下をみる守一万牧と清代の春

非明所は居をうかす

ひあひの招もかきとれあけり水

やうしんや家中結礼を星月歌
ゆき結が野は春の物影ひ
蓬萊の淡

ゆき結が野三の書院乃かやまき
あしひたふ

こぢうとも女房もせんお鏡ひ
まのまや額よりらふ扇と季

宝引の淡

保昌かちうひく形を朋ふとり
蛭子帯かきとり帳乃三枚目

大急殿はいさあ甲ぞとて持送し
年神に櫓舟はぬく小櫃あ那
景清り世帯見えぬや二枚
百人の雪かきこゝろ幕なり
砂柱の水菜もあしり初あ菜
島々路巾ふらふりあ菜指

長嘯の記とおもひ出く

土手ぬるるらんをひけふ菜摘うれ

四月廿日冠里公尔侍府

菜刻之の上手と握る 蕨の那

新 三十三間堂

美い草やこけふの笑見も木綿賣

あつらゝれた枝のさけりや毒乃系

うたえり草や乞食のかもしのそり

芭蕉翁百ヶ日懐舊

雲のうたえ草やむらゝ 冬昔うた

氷肌玉骨とらや

そのしるみー草も香にも梅の皮

うらひの身を逆り ちつ子ね

常とみえくそのんきぬ 杉 瘦

色蕙庵とひく

うら比奈や十日もてもれちうらえ

雪のり茶をへん夢のたや

柳上踏の雪

さうりすよ 雪のり茶 新なる柳の
やうれをよ 雪のり茶 ぬれをよ
柳半豆のよ 雪のり茶 ぬれをよ
風形りよ 雪のり茶 ぬれをよ
ふ魚や 漁翁の 雪のり茶 ぬれをよ
あつらひの 雪のり茶 ぬれをよ

二月十七日原野

富士の嶺都乃大夫 雪のり茶 ぬれをよ
治徳岩城よ 逗留し 雪のり茶 ぬれをよ
たきと根と 雪のり茶 ぬれをよ
松雪や 雪のり茶 ぬれをよ
不二の嶺よの 雪のり茶 ぬれをよ
三航舟ハ 雪のり茶 ぬれをよ
みの物よの 雪のり茶 ぬれをよ

孫とての蚕やしかりふ日向く那
るるともや桑の香よ疎ふも此尾強
春雨やひりぬるのあを枯つし

三物小酒井村親善寺納

如き橋や 軒もろくは春日親
伶人忠門ありや 春のさ
たひありや 太郎まへひとつら
春鶴やと桑はさるて下し

寺納

金柑や 冬青よけりても 稻荷山
爰よりふはる 水月寺

注意

人の夢の跡とらなる日の寺とほし
投記品無有魔事

くもりくもりあふく、彼岸の夕日影
不生不滅のころと

海棠の蘄を悟きぬらん像

二月十五日上京発足

西行の死出跡を旅のちりえり

寒食や竈下り了猶の目を怪しむ

今東より以て食の家よりハ自身書

すしくと搦やつるはやはらしくし

山里の心もちろりや作獨活

葉膚小花は見えきくくくくくく

細らちろく細く鳴るるおの那

この雨をわするる人日次りお

本多総州公書

喜の歌や糸海の歌の夢もろり

悼後立志 初喜を女に

昔のなまの音三井寺 後始喜

引くく喜せりこのは春の約

画續

浦島うたをりのまことの鶴の夢
たのむろしし俵よと守小櫓の船

禁固破りく暇と玉ハル之

破やえぬく以銀紙又紙とめ
やふ入やそれいなるは星ハ星

画墳

拾得の風巾よりや玉箒

あつたや戸とされぬ風巾

柳燕の図

乙鳥の夢やうこうす柳うた
流はりの虹紙きしう燕うた
うけくした顔く維子の距外

角田川

たれも其子と尋はる維子の夢
倍よりうぬちなるへし呼子鳥
花さそふ桃や新番妓の服踊り

酸と桃李の待人 鶯花志ろく
菓子盆と老しし人 形やち花
鶏の獅子牙はくく 逆毛
順袴ハと返よとむや 鶏わふせ
老鳥おきよこのぞらぬ 固本丹
王子曲水おとほうれそ

水呑成鳥帽子小き 笠岩つし

曲水ありあの葉遠る 葉院うね
みくおとや 盗了ぬむかふ 松浦舟
上能なり 雛かまこのこの 新たり
うりまをいりしもの 鹿あ母
辰の初れ 清水坂 狐一目り 那

永代島八幡宮奉納

沙丁也たつこくまふれ 以高貝
親あしむ比目と 踏ん 沙丁丸
法衣さる浪 結うきさら 舟の貝

妙鏡坊より花送る道しよ

文ハあゝ木橋坊し出ま使の那

上野清水寺より

寝る付て志の毛蓋張坊より

折よ殺生偷盗あり

何と也と花小五戒心さるる水

あましくとこそと花も坊より

上野坊

浮助や扈從より白く橋寺

護国寺よりふ耐るあま迎へらる

ふちや花ふたりゆく鳥と嗟峨

それさうり瓢あまらう人もあり

大佛膝うのきらんまのあまを

世の花や五年に前乃女とる

立君せりまぬ

さ終めりくまを下人よ花さるる

徳利ね人のいこりーや花のよき
花さのそ子さつらうも夫婦うま
人五人を象のさうさや花よき

雑目々をさす

山里ハ人城行々花の花見
花折る人の孫りあつらう
花ハ都もあつらうあつらう
かんさーや花のあつらう

三月正當三十日

やうぬさも柳乃系張もさみ

浅草川道遙

程の浅ハ山さきの水やあつらう
小島居る家あまの種りつし山
きり志まき豆腐を切る捨るな
水影や龍さつらうぬさみ
とそにみぬるの五徳やあつらう

綿糸と夏衣風ハ憎かりし

秋航庭ぞくせしきよ

たそひきや散らるる扇取

市間喧

つぎ木屋の子やう足形雨蛙

景改り片目孤動りよ田螺う那

何必逃杯走似雲

はたけたところ近きあひ

夏之部

風光別我苦吟身

大酒やあきそをたき給可南

一とらよ後りなるや夏衣を

越後屋小絹さき多や夏衣

この多のあや物まきあも郭公

有明を面起きやあまの

川むらゑ雅屋あへりきす

徳崎やこのあつたを子親
あつきの水邊をけりふ杜宇
林中不賣薪

せよちやくや山海とまき民町とつれ
禁寺 五加りわくがあまをまに
なうきん人びと走まは孫ぬ教は
おとく交す二おうめ有りは出るりれ
河のく忍くよま原をりふり母とたす

上行寺 二句

灌佛や拾子剣 寺の兒
清仏や墓まじりへる即ちくを
郊の花のいつまの御所の加茂結
誓とみんを郊のむを悟りたり

慈母墓

花水やうろくへる茂系那
僧正孤まきよひとやまの楓

つみくさのちううのまここの牡丹が

龍まよめ

ハ専攻ううう年笑ふ牡丹が那

殿つううまううゆー桐花をま

たのま形まのまのまんらるふ

ううう藤のまよみうう輕う那

妻の櫻の卵虫中詰めちるう

人のまをううううううううう

芥子うううけ花ちる路の項承い

祝産育

たうううの皮平膝の弦つるう

まよかまうううう月とんん返乃秋

能化堂まうう僧がまうううう

田家

子乙女ううううううううう

汁端うううのううううや早苗うう

早乙女忠をまねぬ影を 影をまねり

桐農

燒 鎌の脊中ふあつと 田子より
熾 細沖よりまゝの帆くけ 帆
形より 舟子未だ糸のこゝろ 残 熾
甚なりや 免 熾しをせぬ嵐よ 船

公門小入時

わやわや 舟り 妻子の 舟り 舟り
お志まゝ 女乃 湯沢よ 入て 文こゝろ 舟り
山世の 線や 舟り 舟り 舟り 舟り
舟りの 戸や 舟り 舟り 舟り 舟り
顔ぬらふ 田子 舟り 舟り 舟り 舟り

題 舟り 舟り

舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り
舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り
舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り
舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り

五月西やあしかきんつふ小人歌
木の尻を折るきくや五月園
下宮や鳩根性乃ふくまを
比戸の山よりしろよ何れを閑古鳥

僧正の谷

侘しん平貝物く僧よか母とこと
あ鶏啼教まよ遊りのつとあふ

和古詩

琴城焼く水雞を煮夜酒沸し
枇杷の葉やられえ角あき地牛

宇治より二首

紫あやうあうれてさう新蜜くれ
川より水よ二重水ほるる 恒

愛娘子

鶏啼く玉子あふ故をたうる免

酔く忘

膏の故も枕とくくかハをり

捕虎東坡

七ツ毛の故よりくむや足疾鬼

アツ火や故帳るくくく老ひり

故をやくや褒奴く園の私 終

生死去来

鳥射故をくくくくくくくく

射者中 奕者勝

繩赤よひらきふわく高懸くく

のきけさばうらまぬこれくくく

まうく終くくく後をほくく登の故

悔悔よき始の成りしやくく

くくありの物虫ちくく相色くれ

交代の海きちの終やくく柏

きく入る月や志ありと不二の山

浅草川邊邊

富士川や網代赤火を交ぬ小倉
 氷室やま里葱の紫と白し日かけ糸
 夏草や橋甚まよとく河邊に
 百合の茎ぞよまぬさたようつよきぬ
 樓櫓の小鈴とよいさく車百合
 石粉買や朝見く死と夕日影
 初より中や苗の葉目よけりたぬ
 みるの音や汐に青風の磯馴れ松
 瓜子や桂の生洲走てとくり
 下よりや杉の風あそくもまきさかほ
 葦生をよあはをまぬを虫をよひ

市原より

虫とむと朽木姑小町下走らり
 秋若松まきく阿ふんしてみたり
 死の海を汗悲うま森や夏介人

ふもや内儀たましく 物指り

舟中吟

さくろふの筑波橋出も里急を
夕たも如法華のせこむろも
夕もやたのふ乃坂せのぬく六滝
あつらちやふを坂のうろ傀儡師
様扱ふこく海まの守やあふれ峯
あんゆくの歌うはれぬのあくるる

海軍殿のかり屋あつらふ

杉の葉も青水無月此は旅の那
里此子を秋宮よいさ鼓うた

七日

絆糸の糸人のきぬひもたうれ

山王氏子とく

糸等ましく天下糸や土らる後
番付と賣もまうり此さやひた

瓜むき担子ふ六音阿つさ
小女乃帯ふさき船あつさ
舟暑く覗く水のそく雲孤
舟ふく心一を羽織も浮世舟
昼ようりゆき

うさ霧やうさうはめる麻呂巾
舟の粉も風の垣ある扇うな

舟の粉も風の垣ある扇うな

涼まきまき船の枝もや連と金
夕暮舟すしし交風のちうひる角

流系川歳々吟涼

舟人数舟をれをて涼まき那
河まき人船は波ぬ家縁か事
まきまきまき帆舟船頭のちじ髪
流をまきまき涼む角あり鬼うら

この松子も夏風あり産涼を
幼尚此月おまきりし涼を介
上下と裸の多紙 極ふまき
多此肩とまらむらむこ夏早
夏瘦よ能因志うも小食さる
葬子形くや六月郭公

御稜

夏後法師の宿札まらうり

秋之部

文月や冷と感まら蚊産の中
七夕や暑あまひ入る節せま
星合やゆり産地乃瓜つとま
ゆいあひや山里めらし旁結戸
丸腰の治郎笠とまは四生む之

雨後

鶴や石城ありし乃橋もあ

あさくまや九太結う屋小天の川

新居

塀梢かきくくろくや銀河

移笑うひと河流まをどりの川

り小室結賀よあふまや女房お

二挺立帰棹

整美とてくくくろくつれなう一星のあ

井の柳きのふか湖のつれなう哪

刻の中あまのまきまのつれなう哪

あこ顔やされまのふれく徳口の物

あさくまやう一見む人を亦格子

まままみ去けまのけ物の續

物うけや穂可出まのままま遠あ可致

舞可ままおあ乃二家系うれ

市隅

西側よ燃電あうれや三日結月

宇治山水

川如うや葉立少くは乃ち一か減
中のらあ

幸清の旁にすきやまうー松

藤のうまむすひふまや廿廿芽

萩も^{文畧}の如菩薩まで見し上童

藤より^{文畧}菊を西瓜子枕借も男

井筒^{文畧}の如る画よ

いそはのこみ竹輪よむまふ薄うれ

角文字や伊勢の燈籠の花落

せふかを松

疎花みや薄紙かけそ小松系

二見うて

岩のうへり神風をしそ如芒

沾徳餞別

点き受て人形着りれむすれ
牛ふのる娘は落そな女郎花
もを成あそび存も角せりくし免
芋成ら急て雨を空風の屋とり成
る瓜喰ふ物に安達り系たれや
妓子万三斎成掉く

折釘よのろろやのる妹のせき
鬼燈の加うせりつや輝乃のろ
とむ月や露成たもくろりくす
戸くろもよ雲出さこのは浅芽うま
まむじや松取さ死へ着あふせく
蜻蛉やくろひよ川ある三日は月

歌湯豆腐

阿とのゆり雁成濁さぬ豆腐は
隣家よえ弦とくせ
大絃ハ晒せえ結り落る層

雁の肢見送款をやふひ能上
志く雪よ花う能きさよ救ハ雁
泥龜の鵬平一送るる山へる
平家の衰を悟るふ

あへり来く福系と流一鶉く河
木兎や百舎よをあり巾リを能

秋葉禪定下山

加し多に杖を投るるの空を
悼朝雙

は人平二百十日をたき流し

春日法乐

今幾日あな能表結を春日や戸
砧の所妻吼る犬あり能也

芭蕉声の表

墨染を鉦鼓よ隣るる能く
ある長老のりやめく

中の夕よ森ぬ子衆人さくらさめ

和水新宅

さの植結喜紙仕舞へも礎のや

あ戸ひきの歌なり

甲斐駒や江戸へくと柳葡萄

睨めや泉函谷やらふ強る近

盆と梳と画

中宛書もあなま三日月

玉津島帰望

このみつ更井結月を秋屋のれ

燃杭可火煮つきかたき月夜が

庖丁の片袖くく月乃雪

月のささう詩の舟り山市川武

所思

ひささひも公法くしや十四日

待宵や明月を二見へ道者くれ

本母も有り、その會ありり、その月
烏帽子屋ハ多分、きこふらあろ

兩

約とあり、金買記とり、きこふ月

川とあり、舞屋ハ、けあめ月

汐波とあり、てんもや、りあ月

位文畧濃も老う子はあり、きこふ月

酒とあり、鼓うちあり、りあ月

風雨

雷平、楫ハあり、ひあそ、月、りあ

名月や、居酒のまん、と、頬、あふり

名ろや、休とあり、むる、サ、り、権

名ろや、金とあり、ひ子、の、あ、あ、友

新月や、いつをむ、り、の、せ、あ、山

待乳山

と、青、満、里、掉、あ、あ、ん、平、の、る、鳥

松前の君よ中あつる

こき吹え大根きき母妹の月

如是果のうろを

二子山ふと子むろも母栗結う

泊瀬女子材の志ふさび思ひりり

子篋の袖結糸よのりし白ひくれ

南天やおのう実母中結山の行く

南天や妹代あつる人取小倉やま

たきうりや鼻乃先ちかありのりこ

稲葉小見下女待そへきこ川

早稲酒や稲荷とひ出す姥うり

足あゆみ亭主ふまを新酒かた

横江追悼

一歌と手向りともや新糍

とこややもれきくも若る麦畠

生深とふ雨雲とらぬ生駒山

かろふぬまきて山路の菊と云將
あやうしと道なき何ある菊孤宿
宮川を布とり又酒送らるれ
重箱よ花をささこの野景
外苑のせと船きたよせうら
出世者の一り空由りはらり
時服を葉ふときく忠色うな

九月九日麻を信ひたり人ホ

きや名も早も風一輝く、礼め

手入のやとく、何ふ様うむ何し菊
産寧坂くとりて

菊紅ふもるも路とくもわうり危
たぐもそ水やけきき流るめり

母と月見えりよ

寐く終ぬ六雨元政の十三夜
うまうとや江尻く三穂の十三夜

あつそむ茶師を旅森の十三歌
やと月夜を物なき 木挽早

戸越山庄

むらぬ茶荘の實をけく白うれ
谷へつ多荒れまゝの紅葉ふかり

新殿六間港

あつそぬ蘆のそく免や下紅葉

森のつる松世やささりて岩まつこ
霍り岡古樹のゆきれこ

ありし代の供奉の扇やちる銀杏

洞房の茶屋字兄生家の笛を好らる

うきうき秋悼こ

さつへや笛吹くあそび塗足履

見し月や大くもれこ 九月尽

九月尽

森ぬ秋松風牙のうき味を師走

冬之部

神皇月ふらう葎可まのまき
言砂や祢宜の湯治の神皇月

東河の祢宜を湯治とくそ

揚弓よ名の体どんや神皇
家この留主居たる所り 大社

あまきうけと時ふる秋の鐘の起

響あつ片日ありや

當麻寺奥の枕あり

小秋志くま人と身よま山飛く
松陰也心現尔息と志くれの南
三尺の身城河の志くれあま
守山の子よめり城背時ふる
爰とりう見をくぬま長むり時
風よ文畧世りむろハまぬみ形し栗
このりしとちりぬ陸岸のうらせ貝

曲翠と幻住庵のわと紋君と

まゆしにもすくぬ嵐乃木露ふる

志ろくを片し枯木の夕つく日

うしひらる三井の二王や冬木立

竹葉の森ゆく雨流頂戴のくしみき

お多季の下知も何く人み結このれ

玄徳とや祖又結うふ枝折癖

帰花そをば土窓のをきの焼

閑居安慰

層々路弓の煙我結さぬや灰とく

寐あふ海や巨魁ふとんさぬら

火爐のくく無夢よ高菜と枕と

炭竈や鈴木龜井の朝のまじ

炭うりやおむろかん清水鼻とる

かた炭もそお木家より發りらん

法重も老僧春色と使へり

源氏もや季吟の家孫極子孫
福天の床枕もよもや仕切帳
子ハ衣袈裟親とつ子なり夷譜

新巻

荒ふも屋のそなへり
蕨のたうそ根う名お世をかまへ
のそときてらを頭巾もそそちう
控人のとあ孫切とく火おう那
あ仙よを分や

對友

肉孫の古酒をねるお室孫栗
お海そのハ先ら船とくと大根引
去賓とせよ又るさまう二菜うり
宗孫の孫味うき世を配る納豆う南

つゝ孫牙兔の耳を引たると

金彦のおのまじとらぬる 吾おの起る

柳の家の敷居は槌の音にけり

秋波冷と深者たつゆん 烟の裏

そのおと何とおとるそ 舟の中

樓瓦の傍どのそ

粟めーの焦く自ふや 吾おの起る

あなをきく 舅のこゝろいそけ 吾おの起る

ふきおの浦おめらり

純ひと川さへ子とと 細引うけ

ふくけや祝言のそは能りや

妻ちうぬ教なうみそ 小教衣

鯉鯉をふりさけえれハ 厨の那

足袋うりやくいさちれを 学 經

蛎むきふふふとんぬぬぬぬ

鯉ひと川河一ろを秋のまきりひか

梅津某秋日教習を送り侍る

あまの吞居るあつて人細代り

綱代より大根ぬれとともなり

市偶の侘人

宮某屋をさうしあまのえ交念る

越後屋の算盤さうく小おちり

市川よりいり秋のあまの夢おちり

はつちや崔の扶持乃小土器

はつちや赤子小さきる 朝 朗

市中用

初春や門子橋あふ久戸くれ

あまのふさうの活えや鶴のあま

あつちのまきりあはれり下りたり

まぬくふ大城をらふや神のを

埋あまのあみ勝子や雪の友

雪の日に花をうらうらと見れば
抜ゆ〜とゆきおほ〜と柄ゆく後
をわり〜と新のかき葉よみ〜と

雪窓

換料の史記と師走の螢うす
殊平あへ師走の菊も 妻を〜とけ

南紀平みそ〜と時

雪の日に南大門の氷世の
あこの川交の流波ふ〜とや

前季のハ花に耳ハ〜と

燦を〜と霧〜と 女房めつ〜と

まを〜と志〜と 後所中やす〜と

のち〜と花や嵐〜と 目所〜と

あ〜と 結市誰〜と

い〜と ちも根〜と

あ〜と 糸唾〜と

春王正月老

生死をむりー男を水いをい

福祿壽の賛

おのれ日や年能あーらの新法也

衆胤入懐乃夢をひきき

引つまきく松をくくか胤の那

松のゆやまらさえま戸は後りく

花さこのえ花に尾よの畚おがし

七移やぬぬお聲乃乃まうく

二人静のかやこまの平

ちつこ女扇あうり紙飛あてふ

うのまを柱まうふ里の物あ葉

河州ハ尾歎そあり

うまきひやまうつのお咲る芽結花

春の水わらく能去のまどはりす

ちこそ川 水の 水や 鯨の 髓

四十の 賀し 夕べ 歌 歌 歌

清 秘 蔵 墨 を 墨 墨 墨 梅 尺 寸

さ 枝 の 曲 曲 曲 曲 曲 曲 曲 曲 曲 曲

等 新 新 新 新

や 枝 枝 枝 枝 枝 枝 枝 枝 枝 枝

百 八 の 子 子 送 送 送 送 送 送 送 送

三 日 月 の 命 命 命 命 命 命 命 命

鳥 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

字 字 字 字 字 字 字 字 字 字

う へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

市 隅

市 隅 市 隅 市 隅 市 隅 市 隅 市 隅

う へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

傾 城 の 磯

春柳乃 柳花 柳也 三日結月
青柳子 編編つるふ 夕暮也
柳ふを 鼓もろくふ 要もろく
標下や ちりしの 曲は 法もろく
とろく 急の 習り 何の家を 催れ
り水や 何より ちりし 海苔の味
一升ハ ちりし 文徳より 現 あり

柳花や 柳花の 柳花の 柳花の

格枝繪る合子

あろ 斯 蚤 ふくろ 縮 荷山
藪入や 一ツ ちりし ちりし 文 美
支考の 遠柳の ちりし ちりし ちりし
白河の 関子 見ろく ちりし ちりし

惜春

あろく ちりし ちりし ちりし ちりし ちりし

まへにけり哉けり見よ雪の水

数焼のうねる都の居河間と

一橋よ玉子を送る人なり

わしはとや雪の玉水 十ととせ

杉起る島成ふまをか 雪のやふ

雪まきんて不二のいこまよ 雪肥しう

定めと成つまこふ猫や 雪の中

猫の子のうんけや雪のうら 雪の

餅配り國柄人こまめ 雪のうら

所老賣く各大系の里いこま 雪

約とめく雪のうら僧よ 雪のうら

菜苑

黒の麻くこまけのぬり 去草

所胤のまきとらまらん 雪

雪のうらぬり

傘や 薪のぬり乃 雪のうら

ねふる蝶とほく何れするもそ

無車馬喧

夕日新町中よりさふ胡蝶うね
蝶とふや猿とふいこむ系を教

萩菜

聖堂よこすめく蝶のたのや
若子やあより藤子の巻紙萩

山結らよ乙巻をいふ入日かな

茶の水よかきるおとそ里つそえ

砵子うらふさた及ふ乙巻のや

人うやし雛紙とさる大のそえ

帆は舞のせしとらおろすや若菜

涉草川泛舟

川上無事うらうえらもさる

绿豆の形もあらし桃乃眉

燕千 其所免らさるや若菜の桃

勝豆をひたしそそ 案乃清水うね
岩陰の露くさるるぬわくひか
曲水如 篋まうま 於 宿るくえ
おけくく 木兔も有り 雛はあ
傳へまきくひちのたうや 延表海
縁くくくわひるけり 雛は真
むちのけま 宮後く 小浦りり
紙雛のさきり 雛はたきりり

河雛さるれば 桜花をたきりり

下脚子 漬味見せよ 志ねさる
墨深く 朝彼片く かつかこちん
身かひひる 縁きりきり 糸はら

浦人の花かきりり

ちり耐を斗く 買ん 磯さる

花中尋友

饒頭く人をきりり 山はら

山さくらく 猿 悪く 支僧あらん
やぶさくらく 猿 狐をぬく 梢うま

石河氏宜兩公 山莊あり

二さち乃 乃を角豆う 戸さくら

ひまなまの 繪持をく 山 櫻

目黒松隣 書りて

浮世本 狐 禁下よ されぬ 山はくく

小坊より 松よからまきく 山はくく

永代寺 池邊

池どのむ 犬より 入おのを 形の 教

とるとくも 花 井 間の せの れうま

上野 御

りうり 徒士 乃をさる ころ乃 おひ 糸

酒と 妻つ 乃 妻も 形人う 那

形よ 乃を 形を 幕の 片のり 六

屋形 乃 花 見ぬ 女 中 出より

行露公年々花とあるごとくまはるれば
むねの使者の衆及尔月とるま
を船下けとやりとひとる寺とあり
花と待たこのまゝ人喧嘩買
客すきやあゝ海とむは浮葉ま
海棠の花のうはくやおあろ月
山吹と黄玉青玉 ちあそろま
月とるよ山吹花の素顔よし

湖春湖りりりりり

流くくむ短尺もあは共々夢

宰府余詣の舟中

菜のそれの小坊まゝ角なりり危
こゝ海ありさ御新所んをよ岩はし
亦是とる木屋一見共はしし
南村千調仙臺へかゝるはし
りまや猪口と雄島よりまれば

夏之部

卯月八日母よおられ

身小らりく衣えうき卯月哉
ぬうらやら子手親者こあも之
法辨もあ戸の下若ぬ更衣
後舟や犬もあうらりき
夜這星鳴はるうらや子規
歴くや下馬のうらふし時鳥

百階長屋にて

時鳥人知つらんよ下あ打
わやうたす一二の櫓忠教の船
阮咸う三味線志えし郭公
寮坊主のまねを淋し子雛
たれを形き後知るみる時
愛よある母知の魚そり郭公
おとくさる家や嵐牙むらえん

子もふ戸す枕もぬまに蜀堯

桑名よりて

蛤原やうれ多形くや那と死す

それよりして秋の鳥やけとまに

照滴然不奇たよりやとたに

人間の日月ふぬまにわとまに

月消く腰ぬけ風呂ややとまに

子規まきく宵月かまきりぬ落

帆とあまに舟を松魚う磯かられ

鯉荷若臨を己日の道者うな

浅野家義士等をひとむ

沢得若殘を引ちうりかまつらと

杜若もくふあまをまてまを

かきつるま女を結かまかきつらり

ひらけまの跡もあがりり杜若

ましお花初精をの調をうま

其第...

社

筆より作より朽より大ありし

大町亭法會

法のこめ筍羹皿もかきこり

寄幻呼去老

老僧老筍とらむちうみこる

ころ舟や鞭よりわらぬ箱根山

帘合舟ありこりや浮世復と云

みしうねや船のま川乃納屋の声

木賀入湯のうた

志はしとや子苗よりうねる門

田種まきく水茶屋すく角田川

合羽そと友と形へき田植うな

とれぬめの幟甲や庫のうら

幟より長者おと後や黒牡丹

きり手えりひんりりむめやめ

根合や浅泥よひと花 笹

廻文

けさたんとの免や暮乃富田酒
蝙蝠若屎も子になれあやめ茶
粽うりん 涙よとあてて 終の由り
ちまふおのそはくやきあひの紫分綴

午のま午の月午の日午の時うけふ入

競馬 埒り入才のらまこくか

み月あふやうく吉船とぬぬし

み月あふ酒匂くくさる初茄子

腰越

篠すもま 鬘斗と敷篠のみ月分

傾廓

ハミ虫やあこのこあるまの虎う雨

風ふうぬまのまのくやか母ここる

吐ぬ鶉のほむくまのり於舞う於

社國成以とむ

羽ぬちる啼きつらそいこ
朝日了七里出らり名古屋鮓

湖舟鏡り酒たつて

貫之の靴のすくふわのれ

飯糰乃鯉たつらまみやこ

交る母と四ツ身ふいぢるの光る那

夏川子菘より仕出す美子式

るはあり海のさのれは遠き

妻う家申るよふあ告やん

伝流くまゝる人形飾

梁の蠅かからるる乃うん

蠅わうハ一花をらん其子菊

逐歐陽公賦

蠅の子孫兄よ舜ちさ

坂ハ名のりきり世ハ盗人形由り

一晶の霜坊より

日蓮よ木す息小憚の鳴るは
空際よ吉原をゆく折紙くれ
糸糸也寝も夜もぬるくゆき
隣うす所末めくむやせきの夢
うのききの路よ

夏馬乃基よころれろ命うま
そらし白ふをさへ突さへ陳皮は

望相州

雪ん子あ戸くはり日う照れ
ふあをそ首うをの價う那

祐天和尚よやす

夕負う何をさかきを賣名号
申ふらぬやふき雞垣根うり

酒満

葛おあふの酒典き子も二面

康の花や金魚子うらねいよ簾

霊夢が感して東湖弁天は指傳り

出ぬ糸屋は欺くもさくらあうな

荷切や下多め一切を並せ角

森てうとさきそふ船あうさ

湯雲が香ふ杉乃ありしや知照山

龜毛と餞

うりの皮をまるとまるとかさひりり

糸飯はうらぬ瓜の志つくる船

やう瓜やうつむきて干に發云小船

うさ森や掃をふ似くる去用かし

樟脳子代はゆつる柴の燈うさ

雨乞まるそのふかきりさく

夕立や田を見ぬらり能神さく

ゆかきらよ学鳥わ川く鳴る音う船

夕たらしや家とめらり多啼家鴨

高閣挽涼

香藟散犬う福ふけり雪の峯
西行と武藏坊より清水うね

元角田川午田よみふあきく

いとあきく清水なりけり子前橋

清り濁りりの判後とよといまれそ

此橋と一荷りあやふ氷あ

乳の免え清水うりとの祭うね

かきくくくくく

山後々歌中編の所川さうね
端うけの欄丁あつし星ハ水

傳ぬあつ持し扇よ

朝比奈の楽をへしあつさね
すくく身泥めりあひし遊うね
涼作む安房や上総よ舟をほし
子入り手以欄丁や橋まきく

人よまゝに暑の顔ありけしきく見

自棄

たうそめを船起ひきこひ夕すくみ

菴の留守

すひつそくもふ復乃岩 俵

^{ウ采}谷木の鬼をふおそれそりー笛

市中の光陰はこころの持がきぬ

秋のうらささ太鼓や其神楽

秋之部

詞書畧

空や妹蚊屋張明もこえ七多羅樹

身あしきや宵暁に 舟を免に

おし合や女に子りて歌をんじ

星あひやあうりまよなる 言燃銃

比叡や 弦あうりま

かゝあひや 雙林塔乃 鈴のおそ

石橋やまのりとをう治の星姫も
あふれ川はふかきさししや一志あり
大切なる秋をぬきよりこの川
葛花や角豆も星は玉より
明星や歌はるる流は鞠やころ

七夕歌をしきりよみよ歌

川の水より数あくとりて響ふ傘
水の珠ひと糸よちうくおとさあ

おとくよ嘆えくはれあをんまうて

あさこの本ハ仙洞様かいのちう那
お負年志はれし人も髪帽子
あさうゆふの川宿出し御使
殊晴く雷朝負小いとたき
あさかお結日陰まこわり中老女

増上寺晩景

る老ぬ燈籠使ふさきしる庵

右二方文有畧

玉まつり門の乞食忠 親とをそ
 きあふも〜人や隣 のあふまつり
 柳経やこ乃あふ川を流るの氷
 生霊 酒流りらぬ 親父の那
 親も子もきこふとさう流や遠うり

分郊原

みそをたや分限よとちの 罽謁
 どりりるく 毒花を所は酒とさうらん
 伊勢の鬼見うししとあひくふ 踊う那
 お撲象ぞ髪月代かんあつる魚の那
 祢のつえん 女もうねやとまふ札
 物さつたも 逆櫓も厚くやと火賣
 妻よおられして後子あもをれまらる人なり
 いねつるやあふもをいふもまじつるも

石藏寺對僧

多尔提し茶瓶をこめて苔能成
西海能成也波茸う原へあり葉夜
芳沙烟り平急か夢てす戸の浦
きを里小降の忠守ふまきのりき

芳雨を尾送りのよ朝おけ
わさたり年一のきも花や波能成

暁松亭

獅子舞の胸かよけれ庭の萩
知さうやき飛夢を不二風
弥路のうけうけうふびくはてしそ
たのじしよこまうけう結縁を

夏能成らうよ杪子とわら荒う能
枚子のうをけるとよきいりて

つちもやもみくはるあり庭能成
むもろし依能成らうりの能成能成
鶏頭や松よるい能 清閑寺

ふくふりあやしくちるむる畑茅か

驚くちなる男の推つてゑんあをるる良し

西瓜くふ奴の驚けりかろれせり

や戸畑の芋ゆるわゆる伏猪る

涉茅る系

仇しや焼もろじの骨をり

亡父葬送場より

一緞子隠もあはれも脱る那

酒さひく蝨屋く所あまのそら

詞書と畧と

陣中死飛脚をさくや屋のあ

順檢ふそりけりや百舌死声

餞秋航

諸鶉釣るまのぬ眼目かふ

仁多糸の片山あやりしひ菟

小鳥そとあ

其角一

廿

四十何々小秋の中山五十何々

中村少長丈婦連よそ上京を時

山多も人城う々やむ旅森るれ

ははらもおものはは笑かくりうき

麻の一葉とゆふ小哥のうんよ

文うこと雅可成きほて荒のうん

さどくや致きくあうりはまうれ

葛山遠まどくりのまうこと

鉄炮者それとむくやふくとけ

手とまうくうくみくし純の面

何々後や年ふ太屋者古山簾

貞徳翁五十年忌

帯とまも急なうる船の昔か那

むら子多そ夜ハきし虎う件

心やや答年ゆり影浦らとり

とふ目初月跡りまやむら子鳥

十石を鷺小はく形り 勢安寺

初冬の初雪より鴨の毛を引けんと

鴨の毛や鷺の会衣も道もさけ

あ月を乃猪もも波のありあり

ひらき帯のなほいと思ひを伝へ

たまはとぬり縁組もんこ 里林楽

秋林楽や鼻息もあき 面のうち

ちの雪も年一は少使も 何の川を

初雪ハ益一のり人ななるあな

初雪もやうちよるなる人な誰

雪は日や形跡もみく 顔も毛

雪すも 雪すも 雪すも 雪すも

雪すも 雪すも 雪すも 雪すも

半稔の洲崎も何りや 雪の松

鴨川も鴨を鉄輪も 雪の松

軍兵河原も雪すも 雪すも

秘務の勢の落るる疾をいふ人よ

思深く法帛巾や 電うのら

朝あまや 月をさうまき酒の味

をたふたかきも蘇鉄の女あり

不ふ當春作病夫

酒の急と病をさやまの 師走外

極寧

さためらの遺精もつじきりの水

平家落の遅風尔

宿をいぢりて寝るけし月見外

下川庵んは丸盆おひく月見系ま

葉ふまひ花へ歌人耳

名うま皺ふるひまはらふ世作

めくもや人を抱ひ膝のり

鐘声客船

めくもや御堂の太鼓のひてつ

名月やあとも草よなほくはに

めさうの童よ扇さうさる画よ

冢守の心ゆたもや栗の戸に

山川やあまゑと毬もあなう

しの栗よ袖るき猿のねいひ

栗賣のま冢へうらふ深居り船

崖我遊吟

清滝やあふ梯さるま家ころろ

種竹三竿

作跡る名許由うひとまきこまし

茸や雨幸のあふれ眉つくし

茸猪や山をみあふさよ虚労病

鳳来寺の山を色とるる時

冷泉の珠数りつやむる茸あり

松の繁ふその火先よを薄物油

川茸跡香りなるるや谷貴水

以ねこくや撃と母らに其葉の中
後巻小稲丁も忘る手紙に

太郎二所のみとてり

かぞ出たみ貝ふりくわ子新酒は
何れうとと鹿もみろくん鳴子曳
七十の腰もろくすうちるこ引
雞の下繋つとりり着のさく
いさぬけのたや陀摺菊乃花

荷分り後者短冊りうら

土器の手こえんをえやらみの菊
おふのさく小僧くちるやけくさ好
きくお香や瓶とりたる水耳近
お雞も其石ふちりぬたくの鳥
雨まきし地小這ふ葉と先おん
こハ誰よぬのちとりちん袋まき

三島うそ重陽

門酒やるを能くさきの葉状とら
 宮川をわたりよ河送らせしめて
 重箱に花をささくこの叶葉が
 女の子がねひきまうけり人小
 かよ屎尔うらふ是の妹が那
 親を菊十日のこく城をひきとり
 震妻の跡りもかきち菊 贈
 翁とい葉の交むり何とこり

のちの月 曙をきく日 傘

白鷺の葉ぬくやう糸 後乃月

いづれも古のさかよ

後の月 松やさぬり 江戸能を

とく子とふくよとくや後の月

家こやつ本まも葉し 能乃月

三条橋上

片腕ハみやうの寺 ぬ葉の那

もろちよハたうをへる酒のかん
山姫の深き流きとちか
管根

杉結う糸もそよふ村のあふ
ゆるらるるあふの子まうまのき山

大山

腰押やまゝか岩根か下りま
山かまゝこねる面や細きま

うの山の弦よ

笈の角梢かきまのあつれり
白扇削懸東海天とまの句せつ子よ
は頂并対しまよ握らるちま
お雲の西よりけり屋や普賢不二

怨国離

傾城か小まのまあし九月
戸鹿虫とまのりまふくられりま

冬之部

玉津島

水留居耳中おくなりよきあつま
并ん旅酒匂き橋と成よりり

遊金閣寺

八尋結楠の板戸臥りる志られ
蓑と若く臨了もすり夕時雨
ひら志らま三編の近きまよりり

采ハぬれは冬きさ船くりしるまの那
神鳴かままことふありし雲う那
今態と志らるくはる阿達をりし
とせよ冬く山さかき記のまの

志らるくや阿りし厠悲ひらつ松
ありしちき人をまひ出も時ぬり船
騰む務く茶城やこ我志らまは
ふくしや沖より冬き山結さる

霊山のこらめく

かすきりの尋常なり死ぬ枯死のれ

画讃

松一木乞食の杖のめかき野を

控人やあまのけうよを世や

燈籠や汝がとふき金のり

船隻老父七十の如く

云川流浪とやをや相火桶

すまかすや煙火ぬきを猿のあう

蛇のうつを貝と盗みして都を

名つあふらふよを

炭うやと炭ころをのれをこる

幻燈庵を

雑水かか名をと海をらん冬ころを

正月朔日の例を

徳人や嵐芝居を冬ころり

顔見え世や 曉りさむ 下邳橋
山多崎 森のゆるる ぬる小月を
冬川や 筏もすりぬる 葦の原

五鹿

冬持の足下を かきんあるとさあ
冬多崎の案山子にさるる 鳥外
深きもの 波子ゆむ 矢りよ 束弓
纏あゝふ 帝子よいそん 嵐我の冬

初あらし 馬の目より つきんう 那

柯永老人の手白

山茶花や 福も終るあ おまりのあ
日本の風呂 あたしとく 比叡 山
かふ汁の 素のありをも を朝ハまき
桑の湯やを 湯ささるぬえ ひけとけ
張つて又 粘りきえんや 納豆汁
不昔乃 ちかもかきさあや 氷の素

山犬をさう嗅出守志毛救うを
騾子小白ひのころや 車おの景
ふまこそれ終の志忠の七日市
みそれおも身いあふへさり泣乃鴉

宿僧房

あゝまじやう 関伽の折巻り冬菜
新次へ何く後とさうく未柄の如
武藏船や函士の敷乃あまをさる

寂蓮

和哥の骨殖く川山の抱ふたふ
あさねを尾上の杉とそれまじり
点取糸おこさる懐紙のあくる

二巻す目せはるしと糸か砧う如
みの路り入る

まゆとさきん孫六屋敷志津屋敷
紀川ひくせもあり

たつ弓矢有りありや 三日能月
能好も七分あり 宵の月

を井のあまの画よ

傘持八月の後すすうと也

小くありた月や明石沼

あつとあり

更くと祢宜の斬也杉乃月

月出き坐既うとむく小舟を

遊子

いさな松のありしも江戸能月

厚啼や弓弛たれを昏乃月

長柄文臺之記

かふ月もむかし能櫓の朽目たれ

仲磨画賛

月影や舌を帆よまく三笠や戸

月とあられ越踏の小者 是方の下女

うらやまのぬ波小糸守るるる形歌

清百

あつちの月ふらふらと
在明や待たわうと君と伯父

所思 系うて

いとぬるり三つゝぬるぬるけあけ月
網を若と江戸よけられてあけ月
まうらあやの戸さうも有りあけ月

侍勢編をよせぬそ備と針鼓
空念佛橋をこもれえ何とあけ月
雲霧ハひとこの離や空を造と
芳季のや口をこらとあけ月
忠信の芳野あまひや煤をこひ
鼻か掃孔菴玉や煤あけ月
あけ月
餅を船や灯たて
餅のかけ

弱法沙りとの門由好せ併若札
負松たきさ市能夕何りし
ゆくゆくや路評定之秋明まき

三井物産旭の自画賛

今ある小園十郎や鬼を外
長久教のまきてちほし得方丸
此を察より破たろをかそへまうそ
雅りかとまゝ尔大角とくりまれ



